

インフルエンザは気温が低く、乾燥した季節に流行するインフルエンザウイルスによる感染症で、38℃以上の発熱と、頭痛・関節痛・筋肉痛の症状が特徴的です。妊婦がインフルエンザに感染すると、自然流産や早産、低出生体重児、胎児死亡のリスクが増加しますので、インフルエンザワクチン接種による感染予防は重要です。

インフルエンザワクチンは不活化ワクチンといい、ウイルスを死滅させ、免疫をつくるのに必要な成分だけを取り出し作られたワクチンで、妊娠初期からの接種でも胎児や妊婦の健康に影響を与えることはないといわれています。インフルエンザウイルスにはA型とB型があり、現在のワクチンはA型2種類、B型2種類を含んだ4価ワクチンです。またインフルエンザワクチンにはチメロサルという防腐剤が微量に含まれていますが、その濃度はごく少量であり、胎児への影響はありません。

妊娠中にワクチンを接種することにより、生後6か月まで乳児のインフルエンザ感染率を減少させることができ、ワクチン接種はお母さんと赤ちゃんの双方に利益をもたらします。ワクチン接種後、効果出現には2～3週間を要し、予防効果は3～4か月間期待できます。よってワクチン接種時期は流行シーズンが始まる10～11月が理想です。